

## 日本語の談話における発話・思考の引用：英語との 対照を中心に

松村，瑞子  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1654396>

---

出版情報：言語文化叢書．8，pp.71-94，2003-03-20．九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン：  
権利関係：



## 日本語の談話における発話・思考の引用 —英語との対照を中心に—

九州大学大学院言語文化研究院  
松 村 瑞 子

### 1 序

日本語の話法については、英語のように直接話法と間接話法の区別がつけにくいことがしばしば指摘される(三上(1972)、奥津(1970)、寺村(1984)、砂川(1989)、Coulmas(1985)、Hirose(1995)、鎌田(2000)参照)。それは、日本語の間接話法には時制の一致がないことや、日本語の引用を示す助詞「と」は、英語の *that* とは異なり、間接話法のみならず直接話法にも用いられるためである。さらに実際の談話中では、以下に例証されるように、しばしば「と」が「って」に変わり、被伝達部(引用されている発話)や伝達部(その発話が伝達されていることを示す「～が言った」という部分)の主語や動詞がしばしば省略されており、その区別は一層分かりにくい。

- (1) 磯野：そしたら、この二人がね、2時半頃待ち合わせしたんだけど、駅で、1時50分頃ロバのパン屋さんに会ったって言うの。「なに、それ」って言って、「どこに行ったのよ」って言ったら、お得意さんちによって、お得意さんに一軒よってから、船橋に、船橋からきてんだって、船橋に帰るって言うから、「えっ！」って、「追いかけてよう」って。… (フジテレビ、「遅くおきた朝は」)

終助詞や、感嘆詞、疑問形、命令形のように直接的対話で用いられる表現のある引用を直接話法として一重下線で表し、それ以外の引用を間接話法として波線で表した。しかし、明らかに間接話法であることを示す引用を示す助詞や時制の一致がないため、一応波線としたものも直接話法と言えないわけでもない。同様に、一応直接話法とした一重下線部も、元発話時で用いた終助詞や感嘆詞をそのまま引用しているとも考えられず、単に直接話法とすることに疑問は残る。

日本語の話法については、直接話法と間接話法の区別のみには焦点が当てられることが多いが、実際の談話を調べてみて最も特徴的に思えるのは、多様な形態の直接話法的引用が存在すること、さらにその直接話法的引用文の中には地の文との区別がつけにくくなっているものがしばしば見出されることである。その中には(1)(2)の一重下線部に見られるように、「ある先生がいらして、…って」のように主語と引用助詞をもつもの、「…って言

うの」のように主語が略され歴史的現在形の動詞のみの伝達部をもつもの、「…って言ってやったの」のように主語が略されタ形の動詞のみの伝達部をもつもの、「…って」のように主語も動詞も省略され引用助詞のみが残っているもの、さらに(2)(3)(4)に見られるように伝達部は全く存在しないが鍵括弧が引用文であることを示しているもの、また(4)の二重下線部に見られるように過去の思考を伝達部も引用符もなく地の文と同じように引用しているものもある。

(2) 西村：… そしたらね、ある先生がいらして、「西村君見てるよ」って、「あ、有難うございます」、そしたら「印籠僕に貸さんかね？」って言うの。で、「お貸ししてもいいんですけど、あれ、悪いことに使われると困るんでやめときます」って言ってやったの。(テレビ朝日「徹子の部屋」)

(3) 大人はまた、前言をくつつがえす名人であり、白を黒といいくるめる奸智に長けている。子供がその矛盾を衝くと、「やかましっ。子供がなまいきいうなっ。オマエは大体がなまいきじゃっ。ガキンチョのくせにでしゃばるなっ」

全く見当はずれの怒りかた、声のヴォリュームをあげることで論理的欠陥を埋め合わせようとする。…

(朝日新聞 2002 年 8 月 19 日朝刊、田辺聖子「ゆくも帰るも浪花の夕風」)

(4) 今日も庭で草取りをしていたダンナが、青ざめた顔で部屋に上がってきた。

「いつの間にかユーリィがそばにいたんだ」

子犬のユーリィはフェンスの囲いの中にいたはずだ。彼はフェンスの外である。どうやって出たんだ！…

((朝日新聞 2002 年 8 月 19 日夕刊、村田喜代子「子犬がきた 8 月」)

文法法の範囲内での研究では、実際の談話での形態にはあまり注意が向けられないため、このような直接話法の様々の形態に焦点をおいた研究は少ない。しかし、日本語の談話には、このように様々の形態の直接話法がしばしば見出され、それが日本語独特の効果を出していると考えられる。この論文では、日本語における発話や思考の引用法のうちこの直接話法的引用について、英語のそれと対照させながらその機能を考察していく。

## 2 発話の引用

話法の種類と機能については Leech & Short (1981) に詳しい。これは小説における話法についての研究ではあるが、談話中の話法の分類法と機能を知るのに適しているため、ここで簡単にまとめる。Leech & Short は話法を次の 5 種類に分ける。この 5 種類の話法のうち、番号の小さいものほど伝達者(発話を引用伝達する者)の干渉が小さく元発話者(元々その発話を行った者)が自由に語る形式となる。逆に番号の大きいものほど伝達者の干渉

の強い、伝達者の意向によって操作された形式となる。

表 1

- 1 FDS(=Free Direct Speech/自由直接話法) : 直接話法における伝達者(語り手)の存在を示す2つの特徴(引用符と伝達節)の片方または両方を取り除き、より自由な形式にしたもの  
(例) He said I'll come back here to see you again tomorrow.  
"I'll come back here to see you again tomorrow."  
I'll come back here to see you again tomorrow.
- 2 DS(=Direct Speech/直接話法)  
(例) He said, "I'll come back here to see you again tomorrow."
- 3 FIS(=Free Indirect Speech/自由間接話法) : 直接話法と間接話法の間間的な形式。より直接話法に近いものとより間接話法に近いもの等様々の形式がある。表面上は間接話法のより自由な形式。典型的には間接話法とは違って伝達部(~said that)が省略されているが、時制や代名詞の選択は間接話法と類似している。  
(例) He would come back there to see her again tomorrow. (DSに近い FIS)  
He would return there to see her again tomorrow.  
He would return there to see her again the following day. (ISに近い FIS)
- 4 IS(=Indirect Speech/間接話法)  
(例) He said that he would return there to see her the following day.
- 5 NRSA(=Narrative Report of Speech Act/発話行為生起の報告文) : 発話行為が起こったことを単に報告する形式。伝達者は伝達される発話の形式はもちろんのこと内容も完全に伝える必要もない。  
(例) He promised to return.  
He promised to visit her again.

これら5つの話法のうち、自由間接話法は時制や代名詞の選択は間接話法的でありながら副詞や動詞等の選択に直接話法的特徴も残す話法であり、英語では微妙な効果を発揮することができる。Leech & Short は、以下の例を挙げながら、自由間接話法の効果を示す。

- (5) "Then I take it for granted," observed Sir Walter, "that his face is about as orange as the cuffs of my livery."

Mr. Shepherd hastened to assure him that Admiral Croft was a very hale, hearty, well-looking man, a little weather-beaten, to be sure, but not much; and quite the gentleman in all his notions and behavior; —not likely to make the smallest difficulty about terms; —only wanted a comfortable home, and to get into

it as soon as possible; —knew he must pay for his convenience; —knew what rent a ready-furnished house of that consequence might fetch; —should not have been surprised if Sir Walter had asked more; —had inquired about the manor; —would be glad of the deputation, certainly, but made no great point of it; —said he sometimes took out a gun, but never killed; —quite the gentleman.

下線部の Sir Walter の発話については直接話法が用いられ、彼の言葉がそのまま表現されている。これは語り手（伝達者）の入り込む隙のない形式であり、しっかりと自分というものをもっている人物には好適である。一方、次の段落の巧みな甘言で Sir Walter を騙そうとする Mr. Shepherd の発話については、間接話法での引用から伝達部を省略した自由間接話法での引用へと変化していくという形式が用いられている。自由間接話法は、元々の発話の特徴を残しながらもその発話に語り手（伝達者）が介入する形式であり、Mr. Shepherd の言葉を引用しながらもその言葉に対する語り手の皮肉を介入させるのに好適な話法なのである (Leech & Short (1981): 326-7 参照)。

一方、日本語では、間接話法的特徴を示す時制の一致もせず代名詞も殆ど省略されるため、英語と同様の自由間接話法は存在しない。日本語に独特な間接話法 (Hirose(1995)参照) の特徴 (例えば終助詞や文末の「です」「ます」がつかない形式) と直接話法的特徴 (例えば間投詞や感嘆詞) がたとえ共起したとしても英語ほどの効果はみこめない。(工藤(1995)、鎌田(2000)は、この自由間接話法 (描出話法) と自由直接話法の区別をしないが、この2つの話法の効果の違いを考えると、やはり Leech & Short のようにこれらの話法の区別をする必要があると思う。)

これまでは問題にされてこなかったが、日本語の話法を研究する際に外してはならないと考えられる話法に、自由直接話法がある。これは、直接話法における引用符や伝達節を省略して、伝達者の介入を殆どなくし、元発話をそのまま引用した形態である。Leech & Short (Leech & Short (1981): 322) は、以下のような例を挙げて、英語における自由直接話法の効果を示す。

(5) "He's drunk now," he said.

"He's drunk every night."

"What did he want to kill himself for?"

"How should I know."

"How did he do it?"

"He hung himself with a rope."

"Who cut him down?" (E. Hemingway, *A Clean, Well-Lighted Place*)

上の会話は 2 人のウェイターの素早い会話を描くものであるが、伝達部 (～said の部分)

がないため、読者はどちらのウェイターがどの発話をしたかが分からなくなってしまう。それこそがヘミングウェイが狙った効果だというのである。

次の例(Leech & Short (1981): 323)は、引用符までもが省略された自由直接話法である。

(6) Now. Is there any other witness? No other witness.

Very well, gentlemen! Here's a man unknown, proved to be in the habit of taking opium in large quantities.... If you think it is a case of accidental death, you will find a verdict accordingly.

Verdict accordingly. Accidental death. No doubt. Gentlemen, you are discharged. Good afternoon. (Charles Dickens, *Bleak House*)

Leech & Short によると、ここでは伝達部も引用符も省略され、さらに多くの文が切り詰められた短い形式で出ているために、検死官と陪審員が「事故死」という答申を異例の早さで行ったという印象が生み出される。

自由直接話法は、英語ではこのように特別の効果を狙った場合にしか用いられない。一方日本語では、序節で挙げたように様々の形態の自由直接話法が実際の会話、通常の小説、随筆等に数多く見出され、その効果も英語とは異なっている。

以下の例の下線部に見られるように、日本語では、伝達部がなくても誰の発話であるかが元発話自体の特徴から明らかなことが多い。(7)においては、「おやじ」という呼び名、(2)においては「西村君」のような呼び方や「印籠貸さんかね」のような少し横柄な言い方がこの発話の主がある政治家であることをはっきりさせてくれるし、また「有難うございます」や「お貸ししても…」のような敬語の使用がこれは下の立場のある人が上の立場にある人に対して行っている発話であること（即ち西村晃からある政治家への発話であること）を示してくれる。(3)においては、内容自体から大人の子供に対する発話であることが明白である。

さらに、日本語では伝達部の動詞の形態によっても誰の発話かが明らかになる。松村(1996)(1998)で述べたように日本語では歴史的現在形は一人称を主語とする場合には用いられにくいので、「「印籠貸さんかね？」って言うの」の「言う」の主語は一人称以外の人物、即ちここではある政治家であることが分かる。また「「…困るんでやめときます」って言ってやったの」でも、「言ってやった」の動詞のタ形や「やる」動詞の使用からこれは発話者自体の発話であることが分かる。同様に(1)の「言う」「言った」も、主語が一人称の以外の場合はル形が自由に用いられているのに対し、主語が一人称の場合は決してル形が用いられていないことが分かる。

(7) 山川：お酒飲んじゃってるから…

「おやじ、おふくろ合図してるよ！」

「あーっ！」てね。(テレビ朝日「徹子の部屋」)

- (2) 西村：… そしたらね、ある先生がいらして、「西村君見てるよ」って、「あ、有難うございます」、そしたら「印籠僕に貸さんかね？」って言うの。で、「お貸ししてもいいんですけど、あれ、悪いことに使われると困るんでやめときます」って言ってやったの。(テレビ朝日「徹子の部屋」)

- (3) 大人はまた、前言をくつがえす名人であり、白を黒といいくるめる奸智に長けている。子供がその矛盾を衝くと、「やかましっ。子供がなまいきいうなっ。オマエは大体がなまいきじゃっ。ガキンチョのくせにでしゃばるなっ」

全く見当はずれの怒りかた、声のヴォリュームをあげることで論理的欠陥を埋め合わせようとする。…

(朝日新聞 2002 年 8 月 19 日朝刊、田辺聖子「ゆくも帰るも浪花の夕風」)

- (1) 磯野：そしたら、この二人がね、2 時半頃待ち合わせしたんだけど、駅で、1 時 50 分頃ロバのパン屋さんに会ったって言うの。「なに、それ」って言って、「どこに行っただのよ」って言ったら、お得意さんちによって、お得意さんに一軒よってから、船橋に、船橋からきてんだって、船橋に帰って言うから、「えっ！」って、「追いかけよう」って。… (フジテレビ、「遅くおきた朝は」)

このように日本語では、伝達部が省略されていても他の手がかりによって誰の発話であるかが明らかになる場合が多いため、伝達部を大幅に省略した自由直接話法が用いられることの方がむしろ普通の形式である。そのため、伝達部を完全に残したような形式は逆に特別の効果をあげるのに使われる。

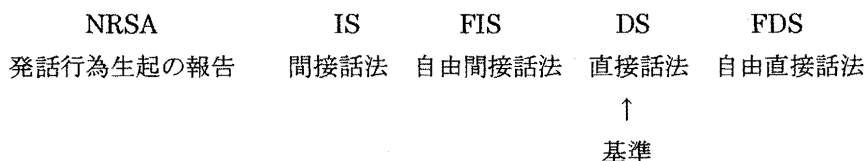
- (8) で、この子が、「おばちゃん、おばちゃん」言うたら、姉が全然返事しないんです。  
で、いっぱい物が私んとこ狭いから置いてあるから、下敷きになってたのかと思うたら、「助けてー！」て姉が言うたんです。筆筈が倒れてきてたんです。で、こうした自分で支えてたんです、姉が筆筈を。(NHK ラジオ「証言 関西大震災」)

例 (8) の下線部にあるように、「姉が…と言った」のように省略しない形式が用いられるのはむしろ、誰かが発話を行ったということ自体が重要な情報の場合である。

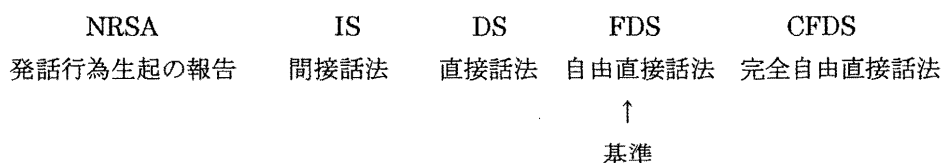
英語と日本語では、明らかに基準となる話法の形式が異なっている。Leech & Short(1981: 334) は、図 1 A を挙げて、英語における発話の話法において基準となるのは直接話法であるとした。一方日本語においては、上の例からも推察されるように、直接話法よりももっと直接的な自由直接話法の方が頻繁に用いられ、基準の話法になっている。さらに、この自由直接話法の中には、伝達部の主語のみ省略されたもの、主語も伝達動詞も省略された引用助詞「って」のみが残っているもの、引用助詞も省略された完全に自由な直接話法のように、様々のものがある。また前に述べたような理由で、日本語では英語

のような形態の自由間接話法は考えにくい。これらのことを考え合わせ、図1Aに対応するような形式で日本語の話法の基準を表現すると、図1Bのようになるだろう。

図1A 英語における発話の話法の基準



B 日本語における発話の話法の基準

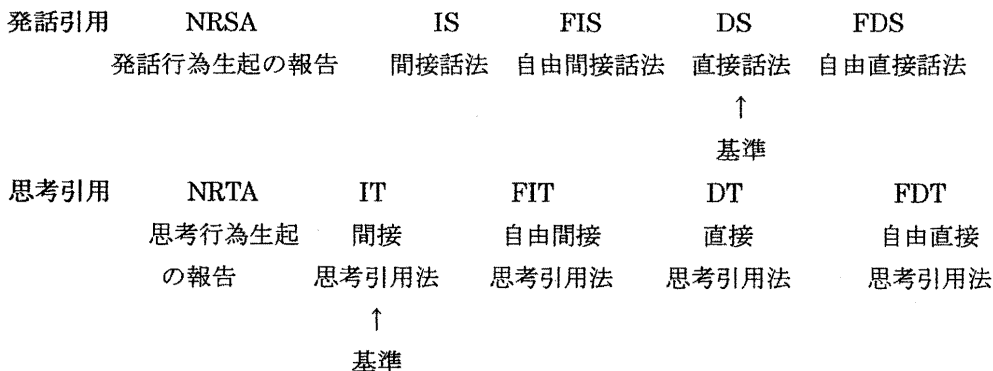


英語と日本語では、基準となる話法が異なるため、それぞれの話法の効果も異なってくる。例えば、直接話法は英語では元発話者の発話の直接的な引用であるが、日本語では自由直接話法が基準であるため、何の省略もない直接話法は発話内容そのものより「元発話者が～という発話を行った」ということを明示したい時に用いられる傾向がある。また、英語では自由間接話法が直接話法と間接話法の間隔的特徴を示し様々の効果をだすことができるが、日本語においては自由直接話法の様々の形態が様々の効果をあげている。

### 3 思考の引用

発話ではなく思考の引用の場合も、基準となる話法が問題となる。

図2 英語における発話引用と思考引用における基準



Leech & Short (1981:344)は、図 2 を用いて、発話の引用と思考の引用の基準の相違を説明する。発話と違って思考は通常言葉として表現されるものではないので、思考の引用は間接的に行われるのが普通であり、思考引用の場合の基準は IT (間接思考引用法) となる。そのため、直接話法が基準であった発話の引用の場合にはより間接的な引用であった FIS (自由間接話法) は、思考の引用の場合の FIT (自由間接思考引用法) では逆により直接的な引用となる。

以下の例(Leech & Short (1981): 346)では、3 つめの文を除けば全て登場人物イーブリンの思考内容を FIT で伝えるものであるが、IT (間接思考引用法) より自由に、鮮明に彼女の思考が描かれている。

- (9) She had consented to go away, to leave her home. Was that wise? She tried to weigh each side of the question. In her home anyway she had shelter and food; she had those whom she had known all her life about her. Of course she had to work hard, both in the house and at business. What would they say of her in the stores when they found out that she had run away with a fellow? Say she was a fool perhaps; and her place would be filled up by advertisement.

(James Joyce, *Eveline*)

このように思考の自由な引用は、上の例に示されているように、FIT (自由間接思考引用法) で十分に表現することができる。そのため、さらに直接的な DT (直接思考引用法) や FDT (自由直接思考引用法) は逆に人為的で不自然な効果を生み出す。

一方日本語の場合、以下に例示されるように、書き言葉においても話し言葉においても IT (直接思考引用法) や FIT (自由直接思考引用法) がしばしば用いられ、しかもごく自然である。英語と日本語には、何故このような違いがあるのだろうか。

- (4) 今日も庭で草取りをしていたダンナが、青ざめた顔で部屋に上がってきた。

「いつの間にかユーリィがそばにいたんだ」

子犬のユーリィはフェンスの囲いの中にいたはずだ。彼はフェンスの外である。

どうやって出たんだ!...

((朝日新聞 2002 年 8 月 19 日夕刊、村田喜代子「子犬がきた 8 月」)

- (10) …居酒屋から八百屋への注文のファクスだった。

「人騒がせな!」思わず破ろうとして、ふと気になった。

「このままにしたら、明日の仕込みに困るだろうな」

眼鏡をかけ直して、電話帳で店の番号を調べ、間違いファクスだと告げた。…

(朝日新聞 2002 年 8 月朝刊、「ひととき」)

- (11) …頭で考えたほど、小説書きは容易ではなかった。ぼくは一年半の間というもの、

ほとんど小説を書けずにいた。

ぼくは小説家として、はたしてやっていけるのだろうか？

ある日、担当編集者が参考に見せてくれたのが開高健さんが作った「編集者マダナ・カルタ九章」だった。…

(朝日新聞 2003 年 2 月 22 日夕刊、森詠「森羅万象に多情多恨たれ」)

- (12) 中条：そうですね。だからまあ、正直いうと、この年でそんなことができるとは思ってなかったですから、だから反対に、「あつ、なんか大人になって、いろんなこと経験した後でやらしてもらえらうがね、よかったかな」っていう気もしてますけども。(テレビ朝日「徹子の部屋」)

- (13) 宝田：…姉はもう、あー、なんかそれをこうはなのけるようにねー、うー「あなたは、役者やってるんだ」ってね、「映画俳優なったんだ」って、「よかったね」ってそう言われてしまったんで、プツツとその、うー、なんか感情、「はーこれ相当苦労は一苦労してきた人なんだな」って思いましたね。

(テレビ朝日「徹子の部屋」)

- (14) 野沢：…で、私自分のところが終わって、戻ってきて、「いよいよ先輩の出番だなー」って思ってこうやって見てたんですよ。で、先輩が徐に行って、前まで行って、マイクの前行って、で、構える格好からかっこいいんですよ。先輩はすっと構えて、「かっこいいなあ。勉強しなきゃ」って思って見てたら、先輩の役がすーって、出てきたら、「あた、あた…」って、「あらあ」と思って、私急いで、こうやって台本見たら、「台詞はやっぱりあるわ」って思ってたら、全部、先輩は来てるし、もういいとこ見せないといけないのに、アタタタってなっちゃってたから、ずっと 30 分のドラマが全部アチャアチャチャで終わりましたよ、それ、やっぱり。(テレビ朝日「徹子の部屋」)

- (15) TAKURO：「あんまりあの一、こう親に頼るのも、ちょっと、情けないしなあ」とかね、それこそ、「ロックバンドみたいにかう彼女に、ご飯食べさせてもらうのも、ちょっとそれも許せない」とか言って、そして、真面目に働いた結果、どんどんどんなんかな、次のライブがあるのにその日がちょうど、なんか、安全会議があるから、「ちょっと、どうしよう」とかね。

(テレビ朝日 TAKURO・「徹子の部屋」)

松村(1996)(1998)(2002)で述べたように、英語は固定視点座をとり出来るだけ視点を発話時に固定しようとするが、日本語は移動視点座をとり視点をかなり自由に発話時から他の時点に移動することができる(国廣(1976: 216)参照)。思考の引用においても、英語では発話時における発話者(伝達者、語り手)の視点(干渉)を残した形式、即ち発話者が思考を伝達していることを表す伝達部(～thoughtの部分)を残した形式や被伝達部(伝達される思考)を伝達者(発話者)の視点から表現し直した(時制や副詞や代名詞を発話時・

発話者から見た形式に変更した) 形式、が用いられることが多い。一方日本語では、視点は自由に発話時から思考が起こった時点に移動されるために、発話時における発話者(伝達者)の干渉を受けずに、思考を行った者の思考をそのまま引用することができる。即ち直接話法や自由直接話法を自由に用いることができるのである。

例えば(4)においては、視点は発話時から「…青ざめた顔で部屋に上がってきた」時に移動され、その時点における「私」が耳で聞いた夫の言葉「いつの間にか…いたんだ」と、「私」が心で思った内容「子犬の…出たんだ」がそのまま自由直接引用法で引用されている。(10)においても、視点は発話時から「…注文のファックスがついた」時点へと移動され、その時点での思考「人騒がせな」「このまま…困るだろうな」をそのまま自由直接引用法で引用している。会話においても同様に、(14)においては、視点が先ず発話時から先輩がドラマで失敗した出来事時に移され、その時点での「私」の思考「いよいよ…出番だな」「かつこいいなあ…」等が順をおって直接引用法で引用されている。また(15)においては、「あんまりあの一、こう親に頼るのも、ちょっと、情けないしなあ」という思考内容が引用符だけの自由間接引用法で引用されている。

日本語における思考の引用の基準は、図3のように図式化できるだろう。対照のために、英語の思考引用の基準をその下に繰り返す。

図3 日本語と英語における思考引用の基準

| 日本語 | NRTA          | IT          | DT            | FDT           | CFDT            |
|-----|---------------|-------------|---------------|---------------|-----------------|
|     | 思考行為生起<br>の報告 | 間接<br>思考引用法 | 直接<br>思考引用法   | 自由直接<br>思考引用法 | 完全自由直接<br>思考引用法 |
|     |               |             | ↑<br>基準       |               |                 |
| 英語  | NRTA          | IT          | FIT           | DT            | FDT             |
|     | 思考行為生起<br>の報告 | 間接<br>思考引用法 | 自由間接<br>思考引用法 | 直接<br>思考引用法   | 自由直接<br>思考引用法   |
|     |               | ↑<br>基準     |               |               |                 |

英語では、視点は発話時に固定される傾向が強いため、元来表に出ない思考は発話時の発話者を媒介として間接的に引用される。それに対して日本語では、視点を発話時・発話者に固定せずかなり自由に他の時点に移動することができるため、視点を発話時から思考が起こった時点に移動させ、思考を行った者の思考をそのまま引用することができる。このため、日本語においては思考を引用する場合も直接話法的な引用が多い。(ただし、会話においては発話引用と思考引用を区別するためか「…と思った」という伝達部の動詞のみは残ることが多い。そのため、思考の引用の基準は、発話の引用の場合と比べやや直接引用

よりの自由直接引用法とした。)

さらに、これは日本語において所謂歴史的現在が数多く存在することへと繋がっていく。以下の例における下線部の歴史的現在、このようにして用いられた過去の「私（現在の発話者）」や登場人物の思考を自由直接話法的に引用したのと考ええると自然である。

- (16) …雨水だけの溜まり水は、金魚たちにとって幸せな環境だったに違いない。何かの拍子にこの水瓶の赤い金魚を見つけたら、隣の老婦人はどんな声を発するのだろう。それを思うだけでまたドキドキした。

(朝日新聞 2002 年 8 月 19 日夕刊、松永真「金魚迷惑」)

- (17) かま場から出て来た喜三右衛門は、えん先にこしを下してつかれた体を休めた。且はもう西の山にはいろうとしている。ふと見上げると、庭の柿の木には、すずなりに生った実が夕日をあびて、赤くかがやいている。喜三右衛門は余りの美しさにうっとり見とれていたが、やがて

「ああきれいだ。あの色をどうかして出したいものだ。」と独り言を言いながら、またかま場の方へ引き返した。いつも自然の色にあこがれていた彼は、目の覚めるような柿の色の美しさを見て、もういても立ってもいられなくなったのである。

(曾我(1984:124)より引用)

#### 4 おわりに

この論文では、日本語の話法を英語の話法と対照させながら、日本語の談話では多様な形式の自由直接話法が用いられていること、日本語ではその特異な視点のために思考を引用する際も発話の場合と同様に自由直接話法的に引用が行われること、を中心に具体例を挙げながら論をすすめた。話法については、文法内だけで処理されることが多かったが、話法本来の特徴からすると、今後はもっと談話における用法を中心に考察を進めていく必要があると思う。

#### 参考文献

- Coulmas, Florian. 1985. Direct and Indirect Speech: General Problems and Problems of Japanese. *Journal of Pragmatics* 9: 41-63.
- . 1986. Direct and Indirect Speech in Japanese. *Direct and Indirect Speech*. Coulmas, Florian. Ed. Mouton de Gruyter.
- Hirose, Yukio. 1995. Direct and Indirect Speech as Quotations of Public and Private Expression. *Lingua* 95: 223-38.
- Iwasaki, Shoichi. 1993. *Subjectivity in Grammar and Discourse*. John Benjamins.

- Johnstone, Barbara. 1987. "He says...so I said": verb tense alternation and narrative depictions of authority in American English. *Linguistics* 25: 33-52.
- 鎌田修 2000. 『日本語の引用』 ひつじ書房
- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキストー現代日本語の時間の表現』 ひつじ書房
- 国廣哲弥 1976 G.N.リーチ著『意味と英語動詞』訳注: 201-19 研究社
- Leech, G.N. & Short, M.H. 1981. *Style in Fiction*. Longman.
- 松村瑞子 1996 『日英語の時制と相一意味・語用論的観点から一』 開文社出版
- . 1998 「日本語の歴史的現在と主語の人称」『韓日言語文化研究』3号: 55-72
- . 2002 「時制表現としての日本語のタ形」『言語科学』32号: 123-32
- 三上章 1972 『現代語法序説』 くろしお出版
- 奥津敬一郎 1970 「引用構造とその転形」『言語研究』56: 1-25.
- 砂川有里子 1989 「引用と話法」『講座日本語と日本語教育4: 日本語の文法・文体』 明治書院
- 曾我松男 1984 「日本語の談話における時制と相について」『言語』13-4: 120-7.
- 寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味II』 くろしお出版
- Wolfson, Nessa. 1979. The Conversational Historical Present Alternation. *Language*, 55-1, 168-82.

## 資 料 集

### 話し言葉資料

#### (1) フジテレビ「遅く起きた朝は」(磯野貴理子・松居直美・森尾ゆみ)

磯野：そしたら、この二人がね、二時半頃待ち合わせしたんだけど、駅で、1時50分頃ロバのパン屋さんに会ったって言うの。なに、それって言って、「どこに行ったのよ」って言ったら、お得意さんちに寄って、お得意さんに一軒寄ってから、船橋に、船橋からきてんだって、船橋に帰るっていうから、「えっ」って、「追いかけよう」って。「そのね、お得意さんの家わかるて」って言うと、「分かる」って言うから、連れてってもらって…。

松居：必ずパン屋さん、お得意さんの所によるの？

磯野：そうなの。近所なんだって。それで、連れてってもらったの。(写真を見せながら)これが、お得意さんち。途中の景色。お得意さんちに行ったんだけど、誰もいないの。留守だったの。直ぐそばで、屋根の上で仕事をしていた人に聞きました。

聞き込み(その1)：この人はね、二人の同級生の久美ちゃんっていう女の子のお母さんなの。この人に聞いたら「今日ね、お得意さんち誰もいなくて、パン売れなくて帰ったんじゃないの」って。「追いつけるか」って言ったら、「追いつける、追いつける。自転車より遅いんだから」って言うの。その、乗ってる何か、車が。「追いかけなさい」って。それで、船橋への道に向かいました。行けども、行けども、いないのよ。抜いちゃったんだか、なんか分からないじゃない。急遽、ガソリンスタンドのお兄さんに聞きました。この人に聞いたら、この人毎日会うんだって。ガソリンスタンドの前通るんだって。今日は、行くのは見たけど、まだ帰り見てないって言うの。「渋滞したら、ロバのおじさんだろう」っていうの。遅いから、遅くても平気で車道走るんだって。

森尾：抜かせないんだ。

磯野：「渋滞したら、ロバの人だから」って、って言っているうちに、「おい、どうした」って言って、このトラックに乗ったおじさんがやって来ました。「あなた、どなたですか？」って言ったら、「俺はこの(?)で有名な中里だ」って。この人は「この辺のこと何でも聞いてくれ」って言うの。聞いたら「俺は今日11時頃見かけた」って。「今何時だ」「3時だ」「3時ならどうかな」って。「ああいう車はロバのおじさんしかいないから、分かるはずだろうがなあ」なんていって、…。 「うえー」とか言ったら、「よし、俺が絵かいてやるよ」なんて言って、どんなのか、それで絵をかいてもらってるんです。そうしたら、どうのこうの言っているうちに、じゃーん、現れました。この、なんか黄色いちっちゃいの。あんまりゆっくりだから。「はい、これです。」

松居：こじんまりしてんね。

森尾：何か、軽トラだよな、イメージは。

磯野：昔は軽トラだったんだって。今はこれ。… 角棟之さん、78 歳。… 「歌はないんですか」って聞いたのよ。そしたら、ここの車の所に、ちっちゃいカセットデッキがあって、ここで鳴らせるわけ。聞かせてもらいました。…昔は蒸パンが主流だったけど、戦争が終わってからは、なんか、焼きパンの方が人気が出てきちゃって、「今はほとんど焼きパンを売ってる」って言ってましたね。大昔はロバがひっぱった。やっぱりロバでやってたって。でも、交通事故とかあって、「ロバは動物園に預けました」って。最後に皆で写真を撮りまして、おじさんまた去っていった。…

(2) テレビ朝日「徹子の部屋」 (黒柳徹子・西村晃)

西村：去年は国のためにいっぱい納めていただきまして、(客：笑) 税務署に代わって、大蔵省に代わって、お礼をいいます。(客：笑)

黒柳：恐れ入ります。(笑)

西村：ええ、何の話でしたっけ？(客：笑)

黒柳：え、ええとプレッシャーがかかって、やがくやっていると、

西村：そう、そう。

ということは、長くやっていると大変なこつたと、

黒柳：ええ。

西村：で、僕もプレッシャーがかかりましたよ。

黒柳：そうでしょうねえ。

西村：で、笑い方一つにしてもねえ、

黒柳：そうなの。

西村：でしょう？もうそればかり。(客：笑)

最初みんなインタビュー受けたら、「笑い方はどうですか？」もう、あのねえ、ある(?) ホテルでね、

黒柳：三笠宮のお父様？

西村：でちよつとご三笠宮と朝食一緒挨拶行っただすよそうそうお父様、でね「あ、今度お代わりになるんですね」「宜しくお願ひします」「笑い方はどうされるんですか？」だって。(客：笑)

黒柳：あ、そう。

西村：殿下もそうなんだから、変わるもんじゃないよねえ、そんなに。

黒柳：でも、東野さんのは、「カッカッカ」っていう風にお笑いになった。

西村：でも(笑) あれはどうなの？(客：笑) あれは誰かが「カッカッカ」って言ったんじゃないの？ほんとに「ハッハッハ」ですよ？僕は「ホッホッホッハッハ」って

ホからハに変わっていきますけどね。(客：笑)

黒柳：「ホッホッハッハ」

西村：そうそう。

黒柳：うふふふ。(客：笑) でも街歩いてますと、「印籠見せて」  
なんて方いらっしゃいませんか？あの「印籠だして」なんて方(笑)(客：笑)

西村：で、思い出した。こないだね、名前は言いませんけども、あるね、こないだいらっ  
しやらなかった？あの\*\*\*さんのパーティー？

黒柳：あ、総理のパーティー。

西村：ちょこっと暇があったんで行ったんですけどね、まあ暇って… (客：笑)

黒柳：暇があったんでいらした。

西村：そしたら「印籠僕に貸さんかね？」

黒柳：いっひっひっひ、政治家の方が？(客：笑)

西村：うん、「印籠僕に貸  
さんかね」って言うの。で、「お貸ししてもいいんですけど、あれ、悪いことに使わ  
れると困るんでやまときます」って言ってやったの。(客：笑)

黒柳：そう、そうですよ。

西村：うっかりあれでねえ、汚職されたんじゃないかなわないもん。」(笑)(客：笑)

黒柳：そうですよ、「えーこの、えーこの」なんて、

西村：そう、そう、なんてやられたら困っち  
ゃうもん。(客：笑)

(12) テレビ朝日「徹子の部屋」 (黒柳徹子・中条きよし)

黒柳：だから、(?)さんっていう、まあ日本の方ですけどねえ、とっても立派な俳優さん  
なんですけども、アカデミー賞の助演男優賞にノミネートされたのかお貰いになっ  
たか、兎に角すごい方なんですけど、それでもやっぱり、ほんとに日本人の役しか  
やるまいと思うと、もうほんとに限られてね、

中条：あー。

黒柳：もう随分断ってきた人生だって、  
そういう日本人の役がないから。

中条：はー。

黒柳：大体よその国の何とも知れない人の役が多くて、

中条：はいはいはいはい。

黒柳：うーん、まあ、そういう風におっしゃっていましたがね。なん  
かそういうことでは、まあ色んな時代、新しい時代になってきたんですね。

中条：そうですね。

黒柳： うーん。

中条： だからまあ、正直言うと、この年でそんなことが出来るとは思ってなかったですから、

黒柳： うーん。

中条： だから反対に「あつ、なんか大人になって、いろんなこと経験した後やらしてもらえる方がね、よかったかな」っていう気もしてますけども。」

黒柳： そうですね。それで、日本にちゃんと地盤があるんですから、そりゃ向こう行ってやってみて、いや面白いじゃないかっていうのはいいですよ。で、日本人の男の人って、あー素敵な人がいるんだって向こうの人に見て、ねえ頂ければ、まあねえ。

中条： そうですね。

黒柳： 楽しみで、まあせいぜいセックスアピールを、ははは、向こうで振りまいてきて頂きたいっていうふうに思いますけども、ねえ。で、よく、まああなたの今のお写真を色々拝見してたんですけど、女の方たちがね、もうほんとに中条さん素敵って、まあ女の方が大部分ですかね、お客様。

中条： そうですね、あのーまあ最初の頃よりは男性が結構増えてきたり、ご夫婦でいらしたりする人が多いですけどね。

黒柳： うん。だけどやっぱり、色気が多い、…まあ色気があるという、であの、あたくし知らなかったんだけど、あの髪の毛垂らしてらっしゃる、ちょっとこう垂らしてらっしゃる、

中条： しけですか？

黒柳： あれ、しけて言うんですって。

中条： しけです。

黒柳： あれ、なんでしけて言う、ちょっと皆さんご覧になるとお分かりでしょうけど、ちょっと髪の毛垂れてるんですよ。これが、

中条： はい。

黒柳： やっぱ色っぽく見せるっていうことある？

中条： ですから、あの色じけっていうんです。

(13) テレビ朝日「徹子の部屋」 (黒柳徹子・宝田明)

宝田： 父は満鉄一あれでしたからね。

黒柳： えー

黒柳： いらっしゃいました。一緒に。



(14) テレビ朝日「徹子の部屋」 (黒柳徹子・野沢雅子)

黒柳：あの頃沢山ありましたよね。そういうホームドラマみたいな。

野沢：色んなのありましたよね。

黒柳：家のパパ…、えー「パパ大好き」、「家のママは世界一」

野沢 世界一

黒柳：それから「ララミー牧場」とかですとか、まあ「バットマン」とか「スーパーマン」とか色んなのありましたよね。で、しかも、あの頃生で声やってらした？

野沢：生でやってたんですよ。だから、失敗が多かったですよ。私はまだ十代だから怖いもの知らずで、バーッとできたんですけど、その頃30ぐらいの人は大変でしょうね。やっぱり、プレッシャーが

黒柳：そうですね。だからあの、ふっと言っただけ、その人の出てくる所になると、ふっと一つはずしちゃうと、全部ふっと言っただけ、終わりまでその人は何もはずさないで…

野沢： いましたよ。私、劇団の先輩で、一緒にドラマに出てまして、やっぱ、劇団一緒だと、後輩の面倒みないといけないっていうのがあるじゃないですか。で、隣に座らせて、「ここに座りなさい」っていうから、「はい」なんて座ってたんですよ。で、私自分の所が終わって、戻ってきて、「いよいよ先輩の出番だなー」って思っただけで、こうやって見てたんですよ。で、先輩が徐に行って、前まで行って、

黒柳： ええ。

野沢：マイクの前行って、で、構える格好からかっこいいんですよ。先輩はずっと構えて、「かっこいいなあ。勉強しなきゃ」って思って見てたら、先輩の役がスーって、出てきたら、「あた、あた…」って、「あらあ」と思って私急いで、こうやって台本見たら、「台詞はやっぱりあるわ」って思ったら、全部、後輩は来てるし、もういいとこ見せないといけないのに、あたたたってなっちゃったから、ずっと30分のドラマが全部「あちゃあちゃちゃ」で終わりましたよ。それ、やっぱり。

黒柳：画面の中の人はどんどんしゃべってるのに 声は一向に聞こえないという。

野沢： しゃべってるのに ねえ。

黒柳：ご苦労はありましたよね。だけど、あの頃ですよ、おばあさんがテレビ見て、見て「この外人さん日本語うまいねって」 あの有名でしたよね、その話は。

野沢： そうなんですよ。

そうなんですよ。そうじゃないんですよ。「最近の外人さんは日本語がうまくなった」って言われたって、そうじゃないんですよ。

黒柳：あの頃からやってらして、初めは顔出しっていうか、普通の女優さんとしてやって

野沢：ええ、やってたんですよ。

黒柳：やっていらっしやって、初期の頃は随分失敗もあって、コマーシャルもやってらしたことがあるんですって？

野沢：はい。コマーシャルは一回は公開録音だったらよかったんですけど、あの、電通に行きまして、プロデューサーから渡されたんですよコメントを沢山、「これ読んで」って言われて。「はい」なんて読んでたんですよ。読んでて、どっかへ車に乗せられてどっかへ行くから、「あ、なんかご馳走してもらえるのかな」ってあたしは思ってたんですよ、若いから。で、読んでたら、ある所へ行ったら、「はいはい、降りて降りて」って言うから、「あらっ」と思ったら今の山野ホールなんですよ。山野ホールに入っていったら、あの亡くなられた三平師匠、三平師匠がやってた番組だったんですよ。で、「はいはいはい、原稿頂戴、頂戴」って言うから、「え、何ですか」って言ったら、「早く、いいから、そいでコマーシャル言えばいいの」ったら、もう、何が書いてあるか分からなくて、そいで「どうしよう」と思ったけど、劇団だから舞台上がっちゃうと、結構しゃべれることは出来るんですよ。お客様が前にいらっしゃるから、べらべらべらべらしゃべっちゃって、で一応その商品だけは褒めたんですけど、「これを買ってください」って言ったんだけど、怒っちゃいましたね、スポンサーは。いろいろないい言葉が書いてあったの全然覚えてないで、言えなくて。

(15) テレビ朝日「徹子の部屋」 (黒柳徹子・TAKURO)

TAKURO：あの一、警備員をやってるうちに、僕出世しちゃったんですよ。

黒柳：ええ。

TAKURO：で、

あの一、最後の1年間くらいはね、面接とかやってたんですよ {ふふっ}

黒柳：あほんと一。

TAKURO：もう、

黒柳：面接官なわけね、あなたは。

TAKURO：そう、ほんと自分でも髪を染めたかったんですけどね、でも、面接官がやっぱりこう金髪で、「君ねえ」とか言っても、説得力ないだろうと思って泣く泣く、こう髪を真っ黒にしたりして {へっへっ}、

黒柳：ええ。

TAKURO：だからそういうところであの一、どんどんどんどんこの仕事の方の比重が、高くなってくるじゃないですか、

黒柳：ええ。

TAKURO：そしたらやっぱりグレイの方が疎かになり始めて、「これはまずいなあ」ということで、あの一、上司の人に相談して、「ちょっとあのやっぱり北海道からバンドやりに来たので、え一、ちょっとやめなきゃならないんです」という話をしたら、困るとか言われたん

ですけどね。

黒柳： ええー。

TAKURO： うーん、それぐらいあの一、みんな真面目にやってたんですけどね。

黒柳： で、

他の方たちもあなたもそう警備員の方の偉い人になっちゃったんだけど、

TAKURO： はい。

黒柳： 他の

アルバイトしてた人もそれぞれみんな、どんどんそっちの方で出世しちゃったんですってねえ。

TAKURO： そうですね、ヴォーカルの TERU なんかはあの一、建築現場で働いてたんですけど一、あの一、もう、いつふつ普通だったらあのちゃんと、上の人と一緒に付いて行くっていうのがアルバイトの常識なのに、でももう、すっかりやれるからあ、一人で、その仕事現場に行って、一人で自分で、こう仕事をして自分の、あの、「今日はこれでいいかな」って思った時間に帰るっていうような、

黒柳： 任されちゃう、

TAKURO： 任されちゃうんです

よね。そうすると、もう勝手にあの一休んだりできないじゃないですか？

黒柳： でもすごいですよね、よく一芸に秀でている人は何でも秀でるとか言うけど、そうほんつとに真面目っていうね、今おっしゃったから一生懸命やることもあるんでしようけど、なんかやっぱり要領かなんかが、ねえ、つかみ、なんか、ん？つかむのが早いとか、

TAKURO： そうですね、だからやっぱりあの北海道から出てくるっていうことで、自分たちの（？）で並々ならぬ決意が、あったわけで、

黒柳： ええー、

TAKURO： 「あんまり、あの一、こう親に頼るのも、ちょっと、情けないしなあ」とかね、それこそ、ロックバンドみたいに、こう彼女に、ご飯食べさせてもらうのも、「ちょっとそれも許せない」とか言って、そして、真面目に働いた結果、どんどんどんどんなんか、次のライブがあるのにその日がちょうど、なんか、安全会議があるから、「ちょっと、どうしよう」とかね。

## 書き言葉資料

### (3) 朝日新聞 2002年8月19日朝刊、田辺聖子「ゆくも帰るも浪花の夕風」

ムカシのおとな、というものはずいぶん、理不尽だと子供どころに思った。子供たちが何か粗相をしでかすと、(茶碗を割るとか、墨を畳にこぼすとか) たちまち目から火が出るほど叱られる。もう生きていくセイがなくなるよど、こっぴどく、どやされる。

それなのに、同じことを自分自身がやると

「ほい、しもた」

かるく、いい捨てるのみ。時にはわが失敗を自分で笑ったりしている。不公平ではないかと子供は不満に堪えないが、子供はヴォキャブラリィが少ない上に、表現力が育っていないから、憤懣を訴えるすべはない。そうやって大人の理不尽に堪えるのも、大切な社会勉強なのである。

大人はまた、前言をひるがえす名人であり、白を黒といいくるめる奸智に長けている。子供がその矛盾を衝くと、「やかましいつ。子供がなまいきじゃつ。ガキンチョのくせに出しゃばるな」

全く見当はずれの怒りかた、声のヴォリュームをあげることで論理的欠陥を埋め合わせようとする。女親だとして同じ。右のセリフが女ことばに置き換えられるだけ。よって子供は、世の不条理を責めるだけでは事態の解決にならないことを学ぶのである。子供には何だって勉強だ。

しかしムカシの大人は無茶なだけではない。子供が本当に悪いことをした、とする。子供が自分でも悪かったと思う。大人に大きい雷を落とされ、ゴメンナサイを泣きながらいう。それでも大人は許してくれない。

「そんなことしてると、今にみい、巡査ハン、くぐりに来はるぞ。手ェうしろへ回るようになるんじゃつ」

——子供は泣いてあやまるのに、親は猛々しく言い募る。

そこへ、必ず、おばあちゃんか、家に年寄りのいないところは、隣のおばちゃんが現れ、「もう、しまへん。もう、しまへんよって、かんにんしとくなはれ」

子供のいうべきセリフを代弁してくれるばかりか、ムカシの女たちが着物の腰に付けている前垂れに子供を抱きとってくれる。おばちゃんの腰は暖かいのである。子供が涙の顔を汚し、ヒックヒックとしゃくりあげている背中を、袖でかばってくれる。

「もうしまへん、ボクは賢いよて、もうしまへん。な？」——おばちゃんにいわせて、子供は泣きながら、コックリ、うなずいていけばいい。

…こういう「時の氏神」が、ムカシの家庭には必ず、いた。それは女だけでなく、おじいちゃんも、隣のおっちゃんも、買って出てくれた。だから子供は、叱られてもイキがつけた。追いつめられない安堵とともに、自分でも「もう、ワルイことはするまいぞ」と自分に誓う気になのであった。——こういう思い出は私にあってはなぜか夏休みのことなのである。

(4) 朝日新聞 2002 年 8 月 19 日夕刊、村田喜代子「子犬がきた 8 月」

ひょんなことからラブラドルの子犬をもらって 3 ヶ月。以来、薄氷を踏むような日が続く。今日も庭で草取りをしていたダンナが、青ざめた顔で部屋に上がってきた。

「いつの間にかユーリィがそばにいたんだ」

子犬のユーリィはフェンスの囲いの中にいたはずだ。かれはフェンスの外である。どうやってでたんだ！

ラブラドルは盲導犬のイメージでおとなしい犬だと思ったのが大間違い。舐めるまではまさに小型版の猛獣だ。猟犬の血を引くだけに子犬時代の暴れん坊ぶりは半端ではない。噛み癖を直すためにインターネットでラブラドルのホームページを開くと、家のブロック塀を引き倒された写真が出ていた。近所で「ベルリンの壁」と噂されているという。

こんな猛獣でも飼えば鎖でつなぐに、自由にさせてやりたい。それで庭の半分に囲いを造ったのだが、脱走歴はこれで 3 回目となった。初回はフェンスを設けた翌日。扉の取っ手にジャンプして、前脚で蹴り上げて開けて出た。すぐ錠前を買ってきてぶら下げた。

2 回目はダンナの練習用ゴルフネットをかいぐって脱出。ネットはゴルフ・スクールの払い下げ品で、たぶん熊が噛んでも破れない。留め具の隙間をねらったのだ。おかげでダンナは半日がかりでネットを完全開封した。

3 回目が今日である。ダンナの土いじりを真似ているうち、フェンスの外まで貫通する穴を掘り上げた。ダンナは怒りまくる。

「だから犬は飼わんと言っただろう！」

と言っても、すでに飼ってしまった犬は庭の向こうでうれしそうに尻尾を振っている。

こうなるとフェンスの下にブロックを埋め込み、モルタルで固定するしか方法はない。だが外は目眩のするような炎天だ。ダンナ一人では倒れそうだ。助っ人に義弟と姉婿へ携帯電話を入れてみるが、どちらも通じない。

ダンナが車で材料を買いに行く。私は仕事のパソコンを切り、顔を洗って入念に厚化粧した。祇園の舞妓みたいな白首ができあがる。それにタオルと日よけ帽子で重装備をする。

たいした働きもできないが、ここは手伝うしかない。やがてダンナが戻ってきた。庭の犬を紐でつなぎ、倉庫からもろもろの道具を出す。スコップ。クワ。水平器。モルタルを練るバケツ。モルタルを塗る大小のコテ。軍手。

買ってきたブロックを車から降ろし終わると、全身水をかぶったような汗だ。さて穴掘りが始まる。クワの刃先に当たる土は固く、太陽は中天で燃えている。掘りながら私は思う。いったい何でこんなことになったのか？ …

(10) 朝日新聞 2002 年 8 月朝刊、松本貴美子「深夜のファックス」『ひととき』

夫が難病で入院している。

困難な問題が次々と起きて、暑さの中、胸を締め付けられるような気持ちで過ごしていたある夜、12 時近くに電話が鳴った。

はっとして、病院からでは、とドキドキしながら受話器を取ると、「ファックスを送信します。

通信音に続いて送られてきたのは、「オクラ 5 袋、ピーマン 5 袋、エンダイブ…、ベビーコーン…」。

居酒屋から八百屋への注文のファクスだった。

「人騒がせな！」

思わず破ろうとして、ふと気になった。

「このままにしたら、明日の仕込みに困るだろうな」

眼鏡をかけ直して、電話帳で店の番号を調べ、間違いファクスだと告げた。

電話の向こうでしきりに恐縮する声。聞こえてくる皿やコップの音。深夜まで忙しく立ち働く若い店長の姿が浮かんだ。

「みんながんばっているんだよね」

小さな親切をしたという自己満足が、ふさがちな心を少しだけ明るくしてくれた。

明日はどうなるのだろうと不安でなかなか寝つけず、明け方まで過ごす日々なのに、その夜はぐっすり眠れたのである。

情けは人のためならずというければ、思いがけず、いろいろなことを考えさせられた夏の夜の小さなハプニング。

(11) 朝日新聞 2003 年 2 月 22 日夕刊、森詠「森羅万象に多情多恨たれ」

ぼくが小説を書こう、と決心したのは、中東取材から帰ってきた後だから、1993 年頃だった。

戦場の国で見て来た、あまりに悲惨で残酷な現実と、そこに生きる人間の哀しみに、ぼくはうちのめされていた。

客観的に事実を書くことができない。見てきたことを語ろうとすると、涙が出て話せない。情けない。これではジャーナリストとして失格だと思った。

だが、真っ赤な嘘を連ねて、人間の真実や悲喜劇を書く小説なら、ぼくにもできるかもしれない。

頭で考えたほど、小説書きは容易ではなかった。ぼくは一年半の間というもの、ほとんど小説を書けずにいた。

ぼくは小説家として、はたしてやっていけるのだろうか？

ある日、担当編集者が参考にと見せてくれたのが開高健さんが作った「編集者マグナ・

カルタ九章」だった。

その中にあった文言「森羅万象に多情多恨たれ」を見て、ぼくは天啓を受けたような気持ちになった。多情多恨は決して悪くないのだ。ぼくはそれまで心につかえていた何か吹っ切れたような気がした。それから、ようやく小説の筆が進むようになった。…

(16) 朝日新聞 2002年8月19日夕刊、松永真「金魚迷惑」

一昨年、僕は自宅から歩いて7～8分のところにアトリエを作った。居心地がよくて一人起居すること多い。

お隣には野趣あふれる素晴らしい庭がある。ところが、美しい風情にはリスクがあった。境界線の垣根のそばを歩くと、すごい藪蚊と遭遇するのである。観察していたら、あちらの庭の小さな竹藪に、半ば埋もれた水瓶を発見した。うまい具合にコケが付き水面には水草が浮いていて、水は澄み切っている。よく見ると、いくつもの小さな生き物が浮いたり沈んだりしていた。ボウフラである。吸血鬼の巣だったのである。

日曜の昼下がり、商店街の金魚屋さんを訪ねた。若い奥さんに「ボウフラを食べる金魚が欲しい」と言ったら、不思議そうな顔をした。しかしすぐ笑顔になった。「これ、これ。これがいいわ」と、3匹200円の金魚を薦めてくれた。それは、祭りの金魚すくいにいそうな元気なヤツで、僕は9匹買って帰った。

ハタと困った。改めて水瓶を見ると、手が届かない。僕はポリ袋の水をはち切れんばかりにして、箒の先にぶら下げ、垣根越しに左手を伸ばした。右手は先のとがった細い竹竿を握っている。水瓶の真上に達したポリ袋をドキドキしながら突いた。袋ははじけた。そして、一匹残らず、金魚たちは水瓶に飛び込んだ。

雨水だけの溜まり水は、金魚たちにとって幸せな環境だったに違いない。何かの拍子にこの水瓶の赤い金魚を見つけたら、隣の老婦人はどんな声を発するのだろう。それを思うだけでまたドキドキした。